

新潮文庫

高みの見物

北杜夫著



新潮社

たか けん ぶつ  
高みの見物



定価は帯またはカバー  
に表示してあります。

新潮文庫 草 131 I

昭和四十七年四月二十日 印刷  
昭和四十七年四月二十五日 発行

著 者 北 杜 夫

発 行 者 佐 藤 亮 一

発 行 所 株式 新 潮 社

郵便 番号 一六二  
東京 都 新宿 区 矢 米 町 七 一  
電 話 東 京 (〇三)(二六〇)二二一  
振 替 東 京 八 〇 八 号

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・植木製本所

© Morio Kita 1972 Printed in Japan

新潮文庫

高みの見物

北杜夫著



---

新潮社版

2055



高  
み  
の  
見  
物



## 目玉医者

揺れている。ゆったりと揺れている。右にゆれ、左にゆれ、それから上下に揺れている。それがもう二カ月の余もつづいている。

といって、なんの不思議もないことなのだ。ここは船の中だからである。水産庁の漁業調査船「大洋丸」の船中なのだ。

「大洋丸」なんぞというと、いかにも堂々とした大船を連想させるが、実は六百トンしかない小船にすぎない。「小洋丸」とか、あるいは「水タマリ丸」とでも改称したほうがいいかもしれない。従って、その船室も、ごく小さくて狭いのもやむを得ないといわねばならぬ。ベッドは二段の寝棚ねだなになっていて、少し背の高い人は、いくらか足をちぢめないと寝られない。

船窓の下に細くソファアが作られている。ソファアというと聞えがよいが、実は低い腰かけにすぎぬ。床の面積は、人間が三人も並べばギッシリつまってしまうくらいのものだ。

壁に、一応机がある。これもごく狭い。その机にむかって、一人の男がひどく真剣になにやら数えている。

「ひい、ふう、みい、よう、いつ、むう……」

机の上にはピースの罐かんが開けあけられていて、そのそばに何十本かのタバコが取りだされている。

この男は、そのタバコの本数をかぞえているのだ。

「十五、十六、十七、十八……」

男はよれよれのポロシャツを着ている。スボンもこれまたよれよれの半ズボンだ。もっとも、船はいま南海を走っているのだから、この一見だらしない恰好かっこうもなかばやむを得ない。

背はむしろ低いほうだ。ずんぐりとして足が短く、スタイルこそよくはないが、ころぶのは上手じょうずそうだ。

度の強い近眼鏡をかけている。頭はボサボサしている。額は広いが、頬ほからアゴのほうにかけて、次第に尻しりつぼみになっていて、三角形のオムスピを逆さにしたような恰好をしている。年は三十を幾つか越したくらいか。

要するにあまり美男子ではない。否、断じて美男子ではない。

「三十、三十一、三十二……」

と、彼はなおも一生懸命になって、タバコの本数をかぞえている。なんでこんなにムキになって数えているのか。

そのとき、ドアがノックされた。そして、返事を待たずに、ドアがあげられた。

その前から、この部屋はエンジンの音でかなりうるさかったのだが、いったんドアがあげられたとなると、エンジン・ルームがすぐ前にあるらしく、ドツとけたたましいさうおん雑音ざつおんがとびこんでくる。

その音響と共に部屋にとびこんできたのは、作業服姿の船員であった。いきなり大きな声で言った。



「ドクター、腹具合がわるいんで」

この会話でもわかるとおり、タバコの数をかぞえている眼鏡の男は、この船の船医なのである。ほかのときこそ役目がないが、病人がでたとなれば、診察し治療する任務をもつ船医なのである。それなのに、このドクターは一向に動じない。

「なに、腹具合？」と彼はごく簡単に言っただけだ。「そんなら胃散、隣の部屋！」

と、その船員は問い返した。

「隣で診て頂けるんで？」

「そうじゃない」

と、ドクターは椅子にデンと腰をおろしたまま、

「隣の治療室に戸棚がある。その中に胃散のびんがある。君、自分でそれを持って行って、飲んでみたまえ」

「じゃあ、診察は？」

「まあ、いいだろう。胃散をのめば大丈夫さ」

「胃散なんかでいいんで？ もっと高級な薬はないんですか？」

「ゼイタクを言うな、まず胃散をのんでみて、それでも効かなかったら、べつの薬をあげよう」

船員は、これはダメだというふうな肩をすくめた。それから、あきらめたらしく隣の治療室へ行ってゴソゴソしていたが、やがて手に薬の袋をもってでてきて、

「じゃ、とにかくのんでみます」

と、ふくれたように言い、部屋を出て行った。

あとに残ったドクターは、

「待てよ、三十三、だったかな？ それとも三十四だったかな。とんだ邪魔がはいつてわからなくなってしまうた。畜生め、まあいい、はじめから数え直すか」

そして、またもや、

「ひい、ふう、みい」とはじめだした。

これは、有体ありていにいつてひどい態度ではなからうか。いくらなんでも無責任すぎはしまいか。

といつて、わたし——この「わたし」が何者であるかは、いずれあとになってゆっくりと説明しようと思う——は、こういう光景をこれまでにさんざ見てきているから、べつだん事改めておどろく気にもなれない。

もともと、わたしはこの大洋丸に、ときどきの陸上生活をのぞいて、もう二年あまり乗っている。そして、主おぼにこの船医の居室に根城をかまえている。従つて、これまでにわたしは何人もの船医の人となり、その日常、その診察ぶりを見てきているわけだ。

大洋丸は、短くて二カ月、長くて半年という具合に、世界各地の海で漁業調査をくりかえしている。そのたんびに船医が変る。日本内地に帰港している期間も長いので、航海のたびごとに、新しく船医をやとうのだ。

しかし、船医になろうという医者はそうはいない。おまけに六百トンの船だ。船医として好適なのはむろん外科医だが、大洋丸には今まで一ぺんも外科医が乗ったことがない。耳鼻科、産婦人科、精神科などが、これまでわたしの知っている船医であった。そして、今いるこのドクター

は、眼科のお医者なのである。

それにしたって、今度の眼科医ほどひどいナマケモノの医者わたしは見ることがない。

「二十、二十一、二十二……」

と、彼はタバコの本数をかぞえている。

そのとき、また新しい患者がやってきた。油に汚れた作業衣からみて、機関部員らしい。

「ドクター、風邪ひいたんです」

「風邪？」と、うわの空でわがドクターは言った。「二十三、今度は忘れないぞ。なんだ、君、風邪だって？」

ドクターは、ようやくこちらに向き直ると、じろりと相手を見た。

「どうして風邪だとわかるんだね？」

「それは」と、機関部員は言った。「喉も痛いですしね。鏡で見たら赤くなってるんです。水っぱなも出てね。それから、熱もありまさあ」

「なるほど」

と、ナマケモノの眼科医は言った。

「しかし、風邪は万病の元という言葉がある。風邪だと思っていると、それが脳膜炎の初まりだったりすることもある」

相手はギョツとしたらしい。しかし、すぐにヘラヘラ笑って、

「御冗談を、そんなら、ちよっくら診察して貰いますかねえ」

「まあ待て。ちよっくと舌を見せなさい。ああ、なるほど、これは脳膜炎じゃない」

「そんなカンタンなことではわかりますか！」

「むろんわかる。これは単なる風邪だ。ええと、二十三、だったかな？」

「あっしは二十六ですよ」

「いや、年を聞いてるんじゃない。こちらのことだ。とにかく、これは風邪だな。アスピリンをのみたまえ。隣の部屋にあるから、自分で行って、持って行きたまえ」

患者の顔には、争いがたい不信の色が浮びあがった。

「アスピリンですかあ」

と、口をとがらして、

「ドクターは、風邪には全部アスピリンしか出さないって噂うわさだね」

「そうだよ」

「それから、胃腸がわるいっていうと、全部胃散だって」

「そうさ」

「しかし、この船にはもっと高価な新薬だってどっさり積んである筈はずですぜ」

「ばかな。新薬をありがたがるというのがそもそも間違いなのだ。治なおらんときには、ぼくはちゃんとそれなりの薬をあげる」

「そんなものですかねえ」

「そんなもんだよ」

「そいじゃ、やっぱりアスピリンで？」

「くだいねえ。アスピリンで大丈夫だよ。ぼくはいま忙しいんだから」

機関部員はあきらめたらしく、それでも多少うらめしげに、隣室の治療室へ消えた。あとに残ったドクターは、

「二十四、二十五……」

とタバコを数えだす。

すると、機関部員がふたたび治療室から現われて、なんだか嬉しげに、

「ドクター、『強力ナオール』という薬がありました。こっちの方が効きそうだから、こっちを頂いて行きますぜ」

「強力ナオール」

と、ドクターは呟いた。

「はて、そんな薬があったかしらん。まあ、いい。なんでも持って行きたまえ」

と、極めて無責任な態度である。

それから、機関部員が行ってしまうと、さらにこんなハレンチな言葉を呟いた。

「こう丁寧に診察しては身がもたん。このタバコにしても、さっきから何遍数えなおしたか、わかりやしない」

そして彼は、さも腹立たしげに、眼鏡を光らせ机の上にかけているピースを、ひときわ猛烈な速度で数えだした。

「三十、三十一、三十二、三十三……」

ドクターは、今度こそ邪魔されずに、最後までタバコの本数をかぞえあげた。

「四十八、四十九、五十と、やはり五十か」

彼はなんだかガツカリしてしまつたように呟いた。

「やっぱり五十か。ううむ」

正直のところ、このドクターは閑<sup>ひま</sup>すぎるのである。大体病人がきても、診察もせず、「胃散！」「アスピリン！」で追いはらつてしまふのでは、結局やることなくつて、ついにはやらすともいふことをやりだすのも無理からぬことであろう。

先日、彼はピースの新しい罐を開けたとき、ふと一抹<sup>まっ</sup>の疑惑を覚えた。それは五十本入りの罐である。しかし、たまには、四十九本だったり、五十一本だったりすることもあつたのではないか。よし、ひとつ、それを捜しだしてやろう。そして四十九本のピース罐を見つけたら、専売公社に投書してやろう。

大体こんな考えは、よほど閑で退屈していないと浮んでくるものではない。しかし、船の中では、まして半分余計者の船医の身では、その閑と退屈がたっぷりあるのである。それ以来ドクターは、新しい罐を開けるたびに、せつせとその本数をかぞえる次第になつたのだ。

「こいつも五十本か」

彼は、のびかけた頤<sup>あご</sup>ひげをなでながら、ブツブツいう。

「してみると、結局みんな正確に五十本なのかもしれないぞ。もつとも、機械でつめるんだらうからなあ。機械では正確なわけだ。あれだけの苦勞をして、どうやら無駄骨を折つたらしいぞ」  
それから彼は、机の上に取りだしたタバコを罐に収めはじめた。ところが、もともとギッシリつまっていたタバコであるから、いったん取りだしてしまふと、なかなか元のようには収まらない。「おかしいぞ。一本余つてしまふぞ。ううむ、これはよほど素晴らしい技術を用いて入れてあつ

たにちがいない。さすが専売公社だ」

つまらないことに感心して、しきりと頤を撫でている。よほどの超閑人とみえる。

「もっとも専売というからには、一手に独占して暴利を得ているにちがいない。正確に見事に五十本入れるくらいのことなんか、考えてみれば当然だ」

こんなことは、なにも考えてみなくても、当然と思える。

そんなふうには、ドクターが頤をなでながら、およそ無益な考えにふけていると、またもやドアに乱暴なノックがあって、一人の男がはいってきた。

さっきまでのが平船員なら、今度のは士官である。チーフ・オフィサー（主席航海士）である。もっとも航海中だから、やはり作業衣すがたで、とりわけキリリとしているわけではない。

「ドクター、お忙しいですか」

「なにね」と、ナマケモノのドクターは平然として厚かましい言葉を吐いた。「いささか忙しかつたですがね。いま、ようやく一段落つこうかというところですよ」

「なにかお仕事でも」

「なに、ちょっととした学問上の疑惑につき当たったもんですからね。いろいろと悩んでいたわけですよ」

と、ドクターはあくまで厚顔である。

「どうもお邪魔するようで申し訳ないですが」

と、チーフ・オフィサーは部屋の隅っこにあった丸椅子を引き寄せて、腰をおろした。

「なに、かまわんです。ぼくは邪魔されるのには慣れていきますから。ところで、チーフ・オフィ

サー、このピースの罐ですがね」

ドクターは、その濃紺の丸い罐を手でもてあそび、

「これには一体タバコが何本はいつていると思えます？」

「というのは、新しい奴……、つまり、この罐が何本入りかかってことですか？」

「さよう」

「だったら、五十本に決ってるじゃないですか」

「本当にそう思いますか。どれもこれもみんな五十本だと？」

「そりゃそうでしょう。だって、そもそも五十本入りの罐じゃありませんか」

「なるほど」

ドクターは、たいそう感じ入ったようにうなずき独り言のように呟いた。

「そんなふうには単純に考えたほうが利口かしらん。しかし、それでは真理の探究というわけにはいかんな」

「ピースがどうかしましたか？」

「いや、なんでもありません。ところで、なにか御用件でも」

「それがですねえ、ドクター、どうも言いにくいことなんですが」

と、チーフ・オフィサーはちよつと照れたように笑って、

「どうも航海も長くなると、いろいろと病人もあって、ドクターとしても大変でしょうがね」

「いや、それほどでも」

「ところで、甚だ申しにくいんですが、その診察についてのことですがね」



「ほほう、なんです？」

「そう改まられると困るが、つまり、ドクターの診察は、あんまりカンタンすぎると、こういう意見もあるわけですよ」

「……………」

「カンタンというより、何も診ちゃあくれないと、こう言ってる者もいます」

「……………」

「で、こう申しちゃあなんだが、もうちょっと丁寧に診察してやるわけにはいかないですかねえ、ドクター？」

ドクターはしばし沈黙した。内心むっとしたのかもしれない、或いは困惑したのかもしれない、と思われたが、わがドクターはなかなかこのくらいのことと恐れ入るような男ではなかった。

「ぼくの診察がカンタン、そりゃそれでいい。ところでこの船では今まで死人が何人出ました？ いや、ぼくが船医として乗りこんでからですがね」

「死人？ いやなことを言わないでくださいよ。そんな者がいるわけじゃないですか」

「それなら重病人で半死半生の者は？ ペストとコレラは？ この船は病人だらけで幽霊船のようになっていますか？」

「とんでもない。どうも大げさですな」

「べつに幽霊船でもないとする、病人はちゃんと治っているわけでしょう？ そうすると、ぼくの治療について、とやかくいわれる道理はないですなあ」

「そういう意味じゃないですよ」